3．漢字の利用に慣れた万葉人は、様々に表記します。

未通女（をとめ）　孤悲（こひ）　丸雪（あられ）　暖（はる）　金（あき）

左右手　十六　八十一　羲之

（　　）（　　）（　　）（　　）

4．和歌表記の具体例

春楊（はるやなぎ）　葛山（かづらきやまに）　發雲（たつくもの）　立座（たちてもゐても）　妹念（いもをしぞおもふ）　（11 二四五三）

（柿本人麻呂歌集歌。漢文表記〈漢詩〉に近く万葉仮名表記がありません。）

宇良々々尓（うらうらに）　照流春日尓（てれるはるひに）　比婆理安我里（ひばりあがり）　情悲毛（こころかなしも）　比登里志於母倍婆（ひとりしおもへば）（19 四二九二）

（大伴家持歌。後期歌人家持は簡略表記の漢文方式も、一字一音の万葉仮名方式も利用しました。仮名方式は平安和歌表記に近い感じです。）

5．和歌世界の具体例

春の苑　紅（くれなゐ）にほふ　桃の花　下照る道に　出（い）で立つ娘子（をとめ）　（19 四一三九）

家持が越中国の国府（富山県高岡市）の春苑で作った歌です。明るく華やかな世界が描かれています。

越中の厳しい冬が過ぎ、残雪が残る春の庭に、春の訪れを感じさせるピンク色の桃の花が枝一杯に咲き乱れ、そのピンク色が根元の道まで染めているように見えます。さらにそこには、ピンク色の頬をしたうら若い娘まで立っていました。

中国文化を深く学んでいた大伴家持は、この唐の絵画の美人画の構図（樹下美人図）にヒントを得ました。そして、それを転用し和歌で色鮮やかに描いて見せたのです。しかも、そこには家持の今一つの遊びがありました。美人画では当然女性に焦点が当てられますが、家持は主客を転倒させます。桃の花に焦点を当て、そこに若き女性を添えたのです。間もなく桃の節句の３月３日でした。

（正倉院蔵の樹下美人図）

（中西進氏のイメージ）

○　現代人の私たちも学びを続けましょう。